

◦ 6月30日 (火) 掲載

【#おうち時間で実篤を知ろう 実篤、欧米へ行く篇】

今回からは、来週末にスタートする展覧会のテーマ「実篤の欧米旅行」にスポットをあて、1936（昭和11）年に229泊230日という長い旅の中で、実篤が書いた日記を読み解いていきます。

展覧会はその名も、東京2020応援プログラム 企画展「実篤、欧米へ行く」ーベルリン観戦と美術行脚ーです。長い！ 今回の展覧会名は39文字ですが、歴代一位はなんと63文字もあるのです。



◦ 6月30日 (火) 掲載

【#おうち時間で実篤を知ろう 109】

実篤が欧米を旅行したのは1936年4月27日から12月12日。

確認されている日記は全部で5冊と数枚の挟み込み。実篤が帰国後に刊行した『欧米旅行日記』(1941年・河出書房)の原本でもあります。



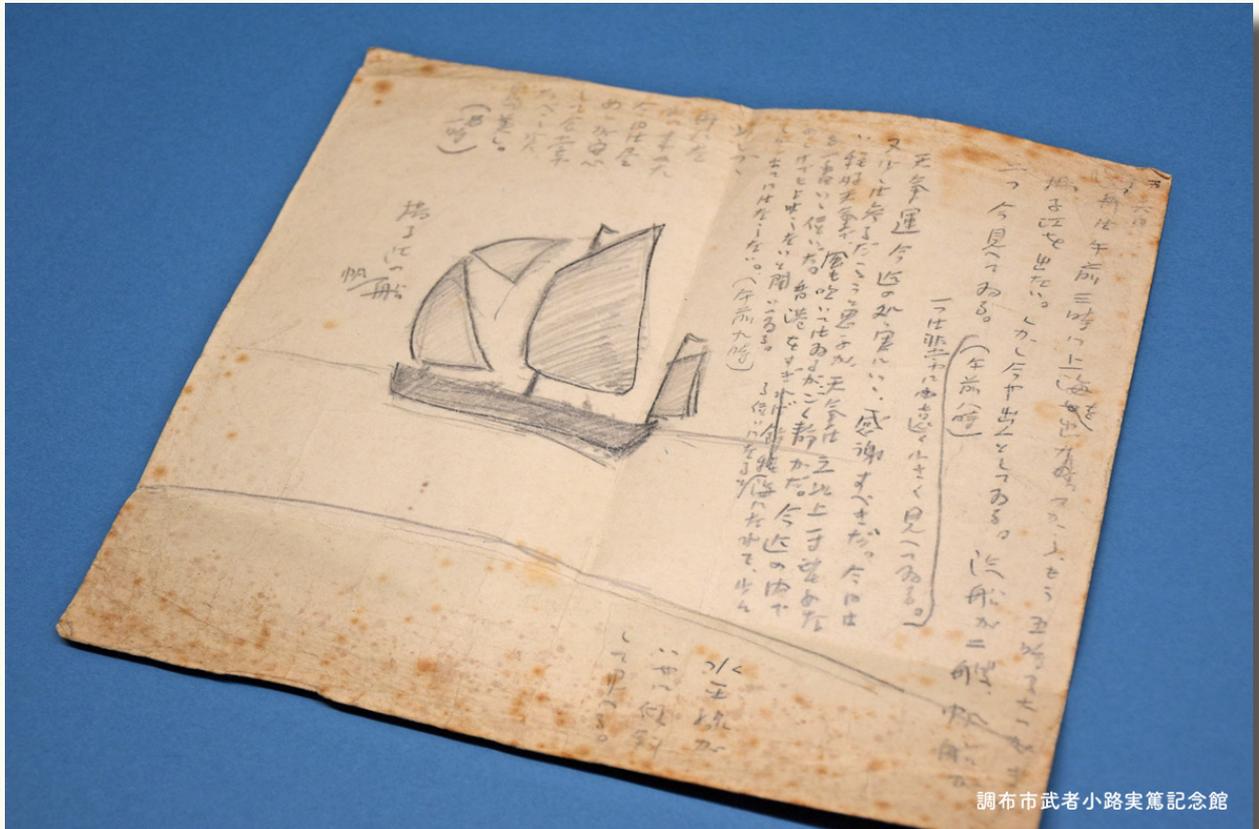
一人旅の実篤は「日記は一番退屈した時に一番丁寧に付けている。つまり船中で話相手もなく、見物するものもない時、一番多く日記をつけている。だからこの日記は三つの大洋上の日記と題してもいいかと思った」と言います。文章だけでなく絵も描かれ、旅での喜びや感動、苦勞なども知ることができます。



◦ 7月1日 (水) 掲載 《午前》

【#おうち時間で実篤を知ろう 110】

飛行機でびゅーんと海外へ行ける今とは異なり、日本からフランスまで当時は船で40日かかりました。船酔いに苦しめられた実篤ですが、寄港地ごとに異なる風景や風俗、習慣を見るのを楽しみにしていました。



調布市武者小路実篤記念館

日本では、横浜を出港して名古屋で一度下船し、汽車に乗り換えて大阪で妻の両親、奈良で志賀直哉に会い、神戸から再び乗船しました。門司で日本に別れを告げ、海外最初の寄港地は中国・上海。

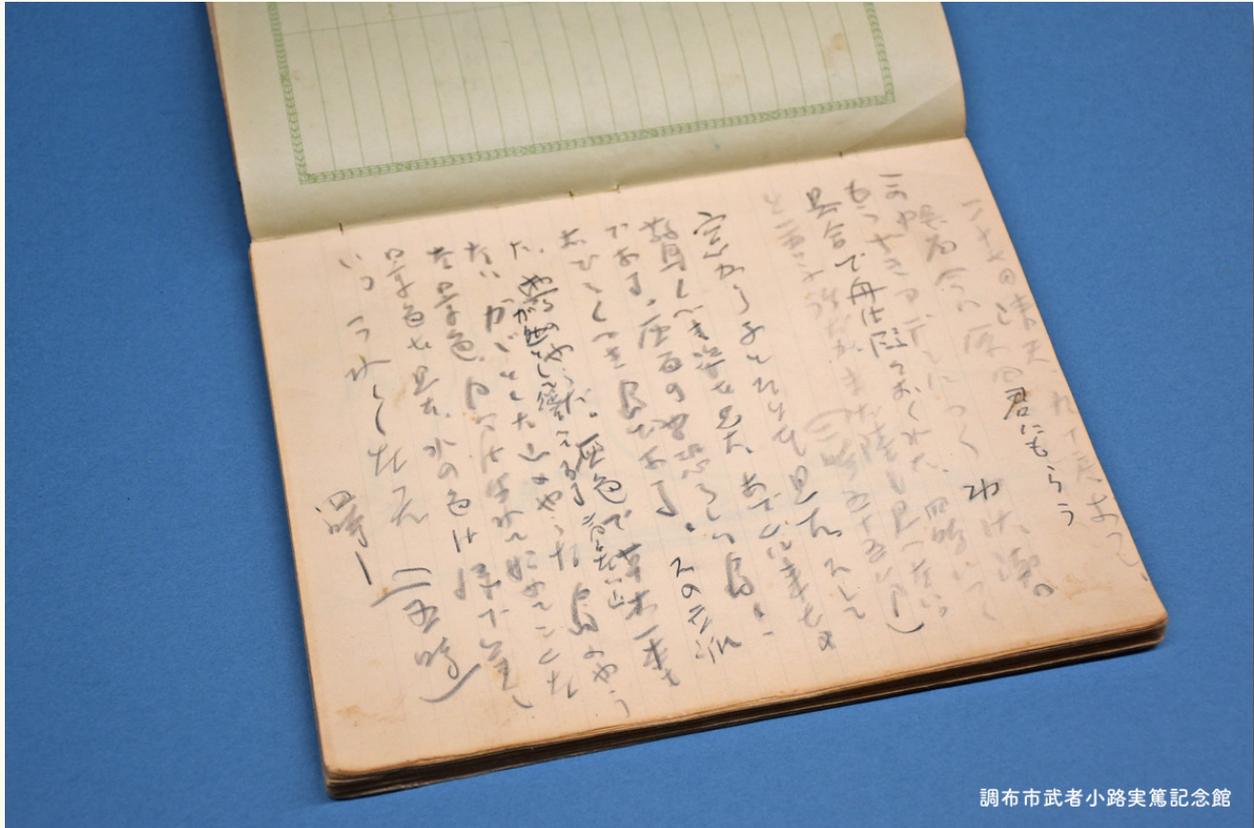
この5月6日の日記は上海を出港した日に見た揚子江の風景。天気も良く、船も静かで、景色を楽しんだようです。



◦ 7月1日掲載《午後》

【#おうち時間で実篤を知ろう ちょっと嬉しいキリ番 111】

上海・台湾・香港・シンガポール・ペナンを經由し、イエメンのアデンに到着しました。
5月7日「窓からふとそとを見た。そして驚くべき姿を見た。アデンに来たのである。」



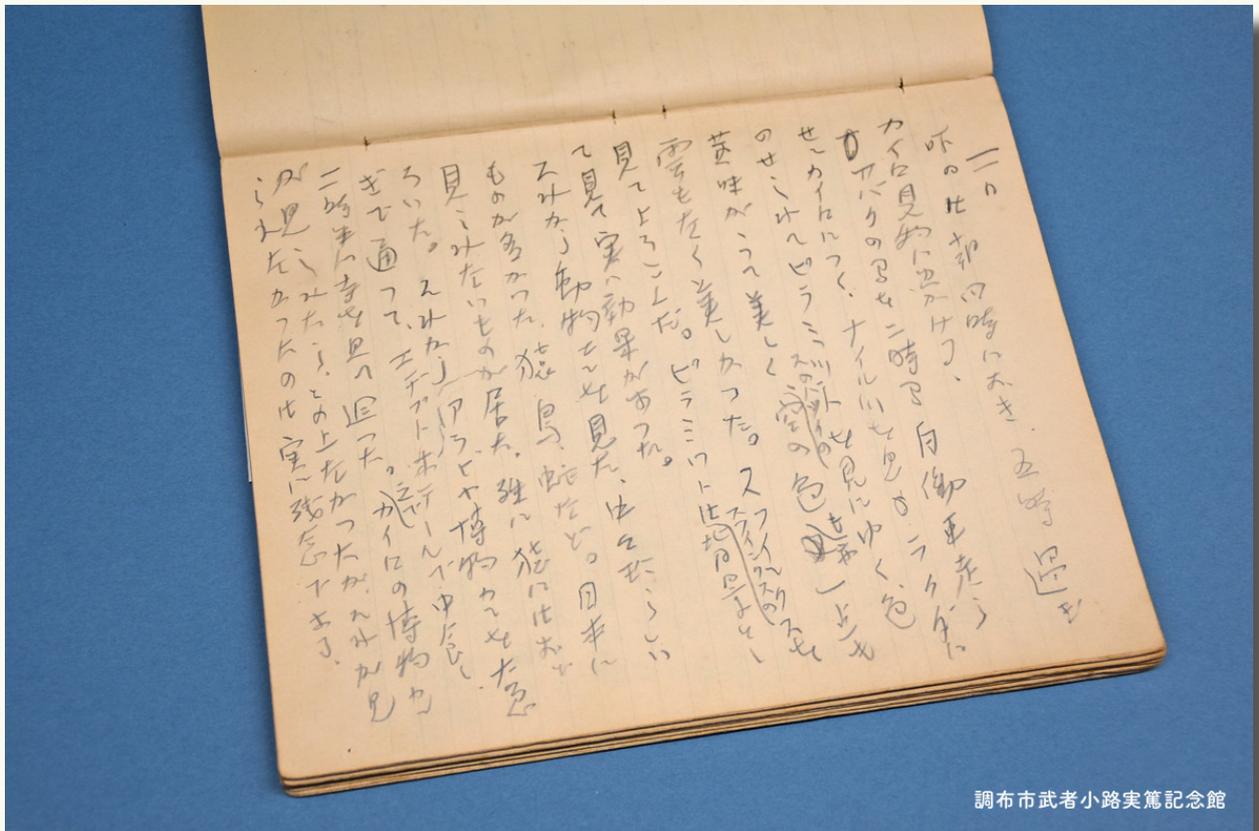
灰色で草木が一本もなく、険しくそびえ立つ山、緑色の美しい水があるアデンの風景は、51歳の実篤が生まれて初めて見た景色でした。移動の自動車が勢いよく走ると熱風が顔にあたり、その空気が今まで経験がない暑さだったと書きます。



◦ 7月2日 (木) 掲載《午前》

【#おうち時間で実篤を知ろう 112】

アデンの後はエジプトへ。6月2日砂漠の間を二時間、自動車走らせてカイロに着く。ナイル河を見、ラクダに乘せられてピラミットを見に行く(略) スフィンクスを見てよろこんだ」エジプト観光の王道ですね!



エジプトを楽しみ、いよいよ念願のフランス・マルセイユへ向かう実篤。

嬉しさからか、6月2日「あと四日でマルセイユ」、4日「あさって、マルセイユにつく」、5日「いよいよ明日、一万一千海里の航路を終えてマルセイユに上陸するわけ」、6日「今日いよいよ着くわけ」とカウントダウンしています。



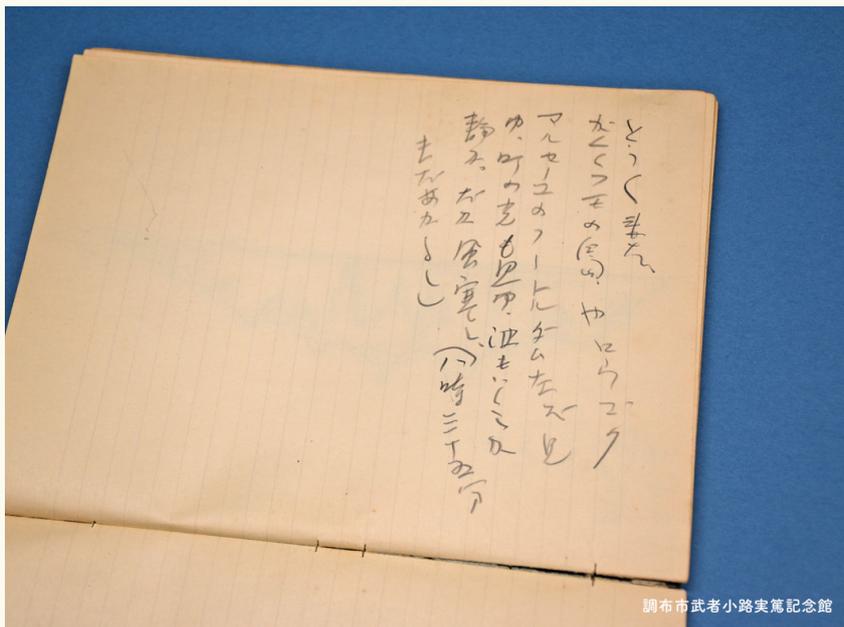
◦ 7月2日掲載《午後》

【#おうち時間で実篤を知ろう 113】

6月6日「とうとう来た。がんくつ王の島や、ロウゴク、マルセーユのノートルダムなど見ゆ、町の光も見ゆ、浪もいづらか静か。だが風寒し(八時三十五分、まだ明るし)」

旅の目的の一つ目はドイツで開催されていたベルリンオリンピックを観戦し、日本にレポートを送ることで、朝日新聞社から依頼された仕事でした。二つ目は、美術館を巡り、西洋美術のオリジナル作品を見ること。

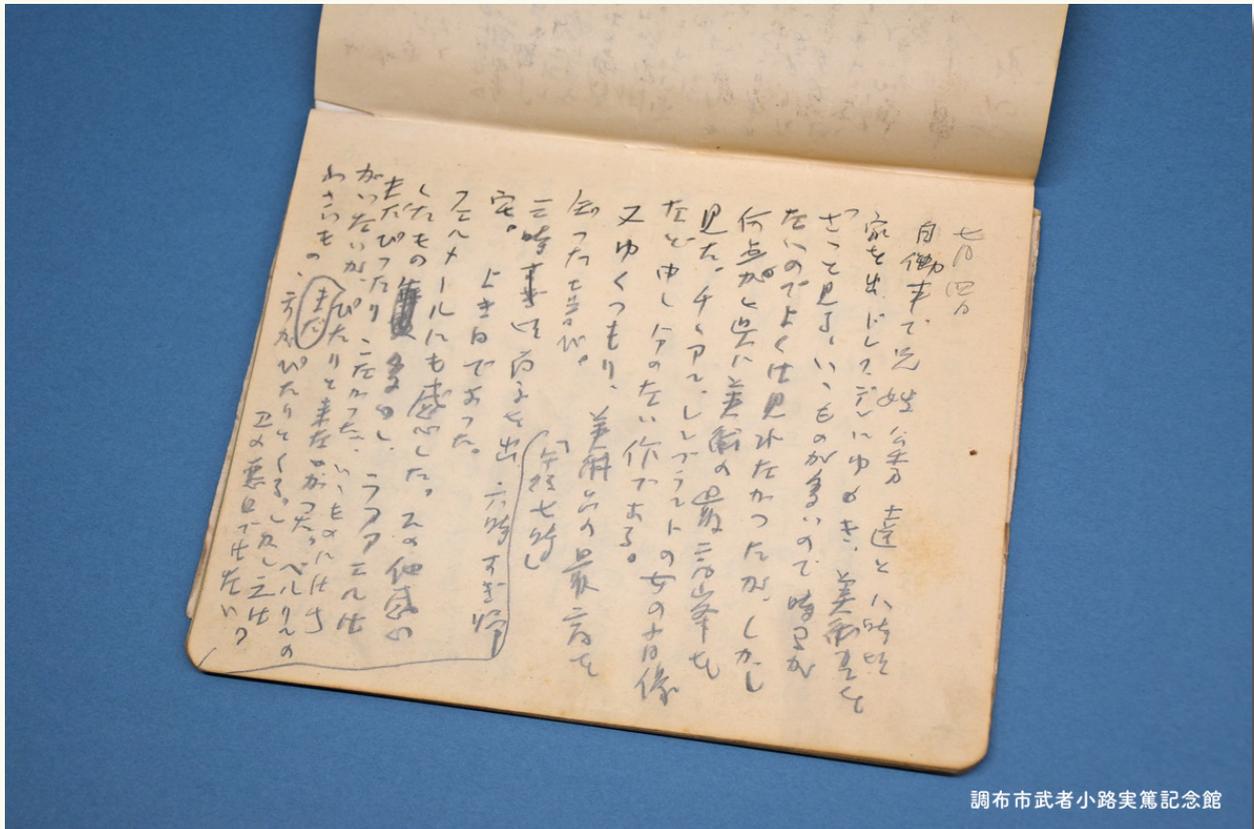
若い頃から美術鑑賞を好んだ実篤にとって最大の目的であり、心から楽しみにしていました。



◦ 7月3日（金）掲載《午前》

【#おうち時間で実篤を知ろう 114】

7月4日「ドレスデンに行き、美術館をぞっと見る。いいものも多く時間がないのでよくは見られなかったが、しかし何点か真の美術の最高峯を見た。(略) 美術の最高を知った喜び」



マルセイユに到着してからパリを経由してベルリンに到着した実篤。

この間、日記は6月29日しか書かれていません。

ベルリンには当時、駐ドイツ日本大使だった兄の公共が住んでおり、実篤はここを拠点に、北欧やオランダ、オーストリアにも足を伸ばしました。

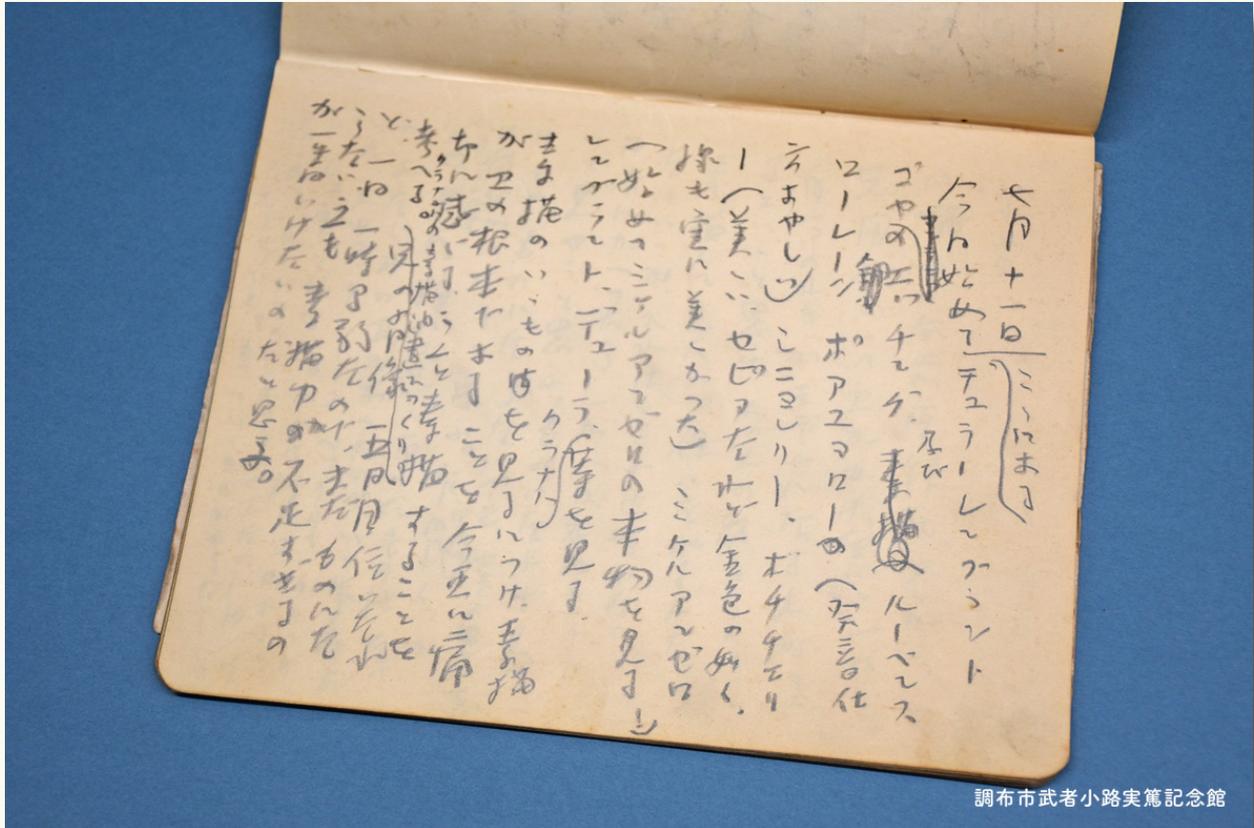
この欧米旅行も兄のすすめで決断したのです。



◦ 7月3日掲載 《午後》

【#おうち時間で実篤を知ろう 115】

7月11日「初めてミケルアンゼロの本物を見る!」



前後の文章で「デューラー、レンブラント、ゴヤのエッチング及びルーベンス、ロラン、ポアユオロー（発音仕方あやしい）シニヨレリー、ボチチェリー（美しいセピアなれど金色の如く線も実に美しかった）」「レンブラント、デューラー、クラナハ等の素描を見る」とたくさんの作品を見たことが分かります。



◦ 7月4日(土) 掲載

【#おうち時間で実篤を知ろう 116】

7月30日「ストックホルムの国民美術館を見る。中々いいものがあった。(略) クルベーには代表作の一つと思われる「髪をくしげづる女」があった」



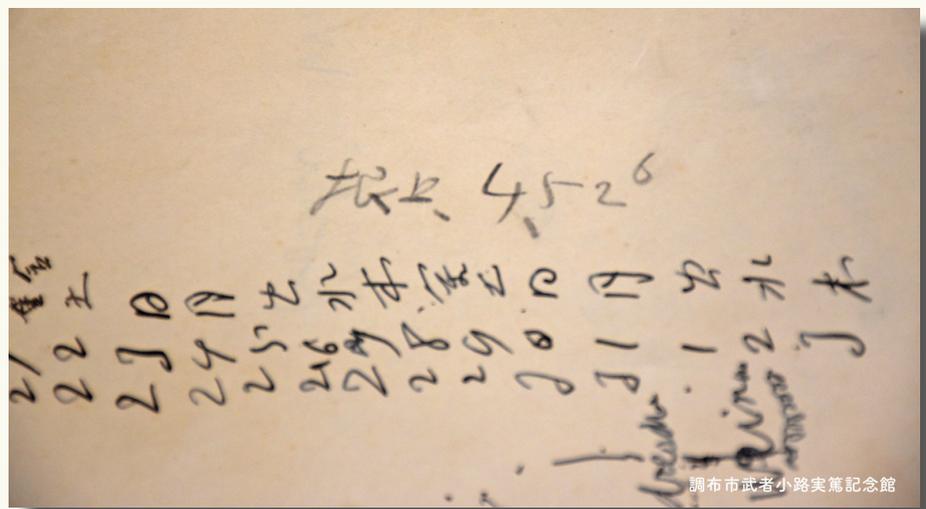
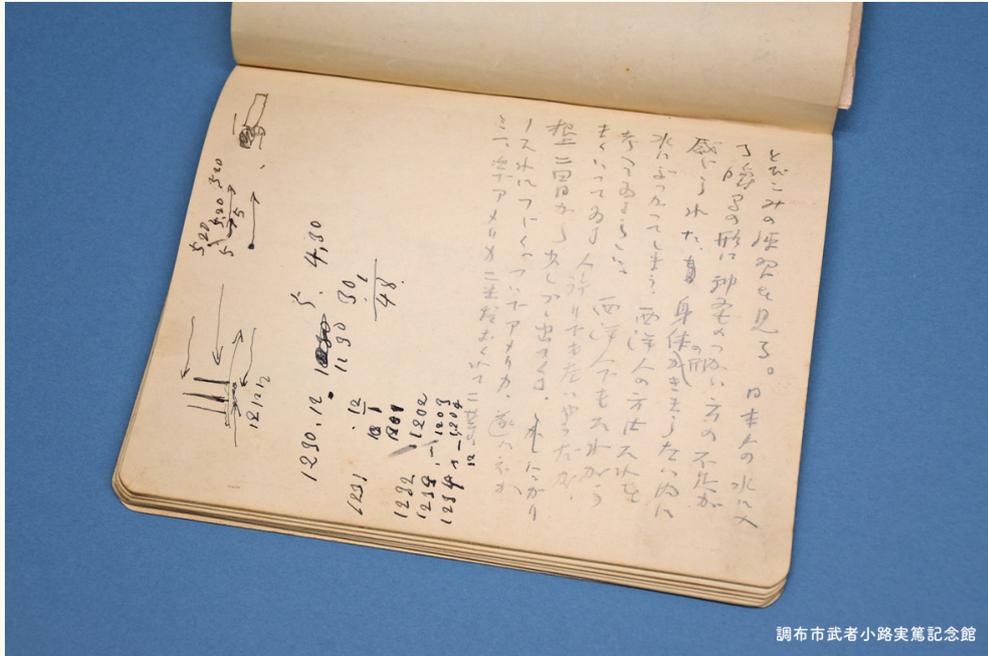
スウェーデン国立美術館を訪れ、ギュスターヴ・クールベの「美しきアイルランド女(ジョーの肖像)」を模写しています。北欧は他にデンマーク・コペンハーゲン、ノルウェー・オスロを訪れ、コペンハーゲン国立美術館やデューラーの展覧会、ハンブルクの植物園、オスロの民族博物館も訪れました。



◦ 7月5日 (日) 掲載

【#おうち時間で実篤を知ろう 117】

「とびこみの練習を見る」とあるように、実篤は、1936年8月1日～15日までドイツ・ベルリンで開催されたオリンピックを観戦しています。



前半はとびこみの練習について、後半「根上二回目から少しづつ出てくる」は競泳男子 400M 自由形の予選です。「ハンガリーそれにつづく。ついでアメリカ。遂にネガミー(漢数字の1)、次でアメリカ二米(2メートル)程おくれて二等」とレース展開を細かに書き残し、タイムのメモもあります。

今ではテレビでの海外中継が当たり前ですが、テレビ放送がないこの時代、新聞各社で報道合戦となりました。実篤は朝日新聞社の依頼で派遣され、連日スタジアムに通って観戦レポート書き、日本に送られたレポートは新聞に掲載されました。

実篤のほかには、西条八十や横光利一も現地へ赴いています。



◦ 7月7日 (火) 掲載

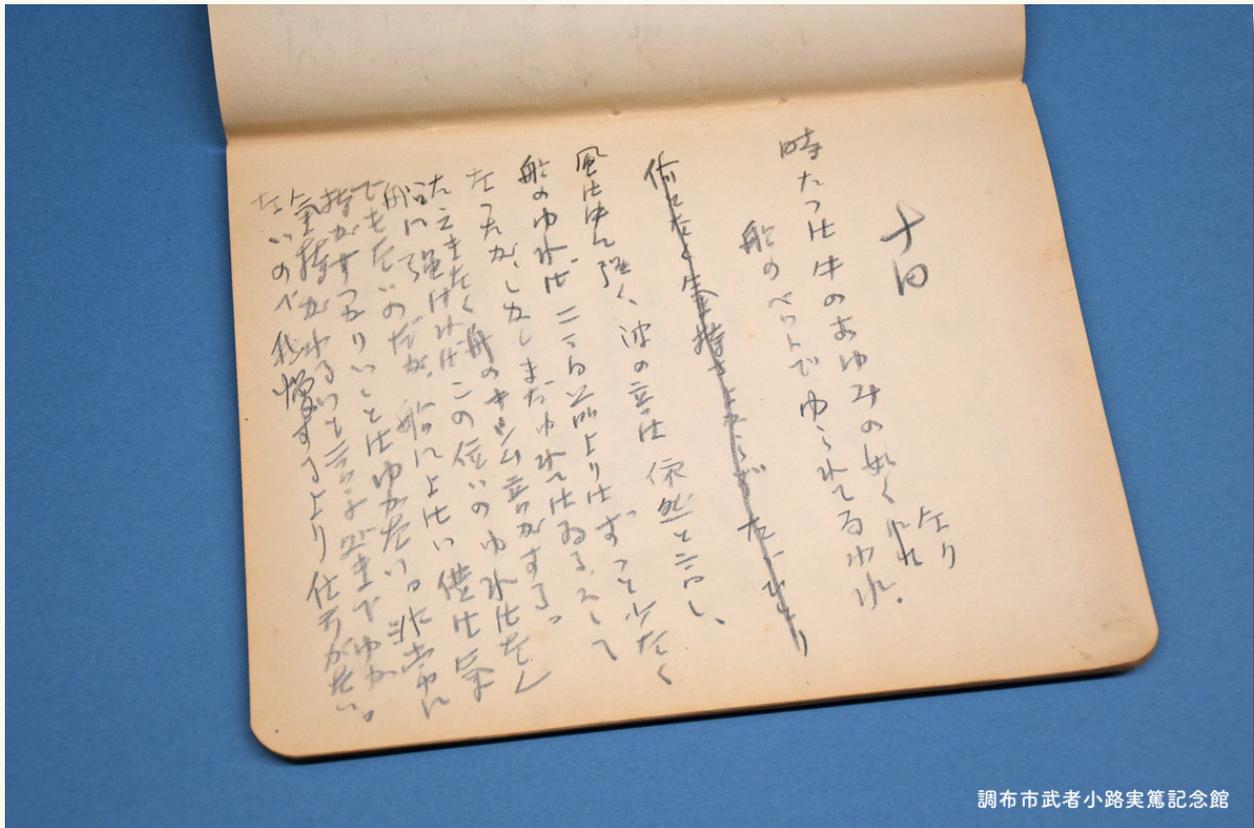
【#おうち時間で実篤を知ろう 118】

オリンピックが終わった後は、思う存分ヨーロッパ各国の美術館を巡った実篤。日記は8月22日を最後に11月までとびます。11月10日「時立つは牛の歩みの如くなり 船のベッドで揺られてるわれ」

自由詩を好んだ実篤にしては珍しく定型詩です。

イギリスからアメリカへ向かう船が進まないまどろっこしさと、船酔いで寝込んでいる情景が浮かびます。この日は「ふるさとは余りに遠きことなれば 何とはなしに心さびしき」とも詠んでいます。

旅も後半になり、日本で待つ家族が恋しかったのでしょう。



調布市武者小路実篤記念館

旅中の定型詩は他にもあり、6月3日「うすがすむクレタの鳥を仰ぎ見つ 夕日をうけてわが船すすむ」、11月21日は「しみとおるさびしさ我はこらえつつ アルノのきしに画をばかくなり」と詠んだ後に「もっと自由な形のものがかきたいと思う。今様の形は一寸すきである」と書きます。

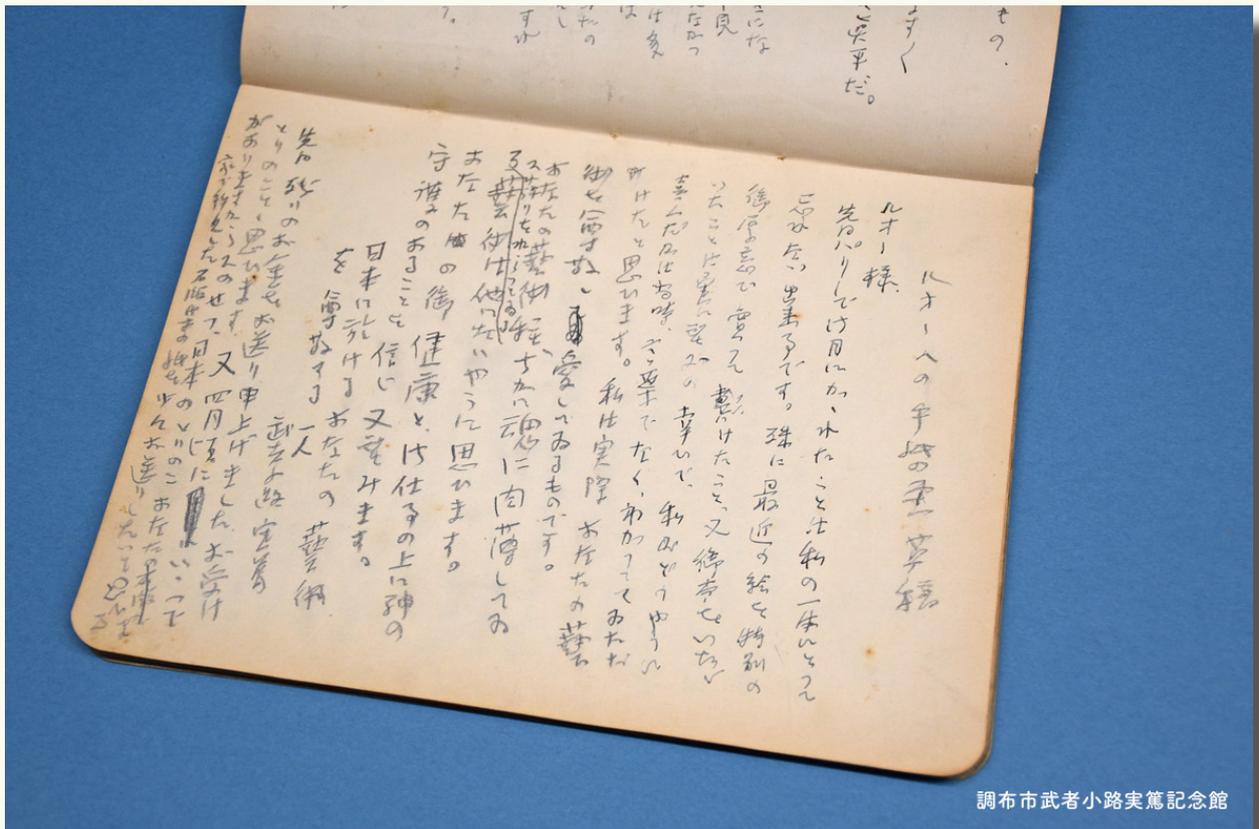


◦ 7月8日 (水) 掲載

【#おうち時間で実篤を知ろう 119】

11月12日ルオー様 先日パリで御目にかかれた事は私の一生にとって忘れない出来事です」これは手紙の下書きです。実篤は、10月に滞在したフランス・パリでマチス、ルオー、ドラン、ピカソに会っています。

ルオーから油彩画「ピエロ」を買った実篤は「その画もまだ出来たてのほやほやで、焼芋だったら湯気がたっている処だ」(『湖畔の画商』より) と例え、ルオーがその場で署名してくれたことも喜びました。また、絵の持ち方を教えてくれ、自動車にぶつからないようにと気遣ってくれたことにも嬉しかりました。



◦ 7月9日 (木) 掲載

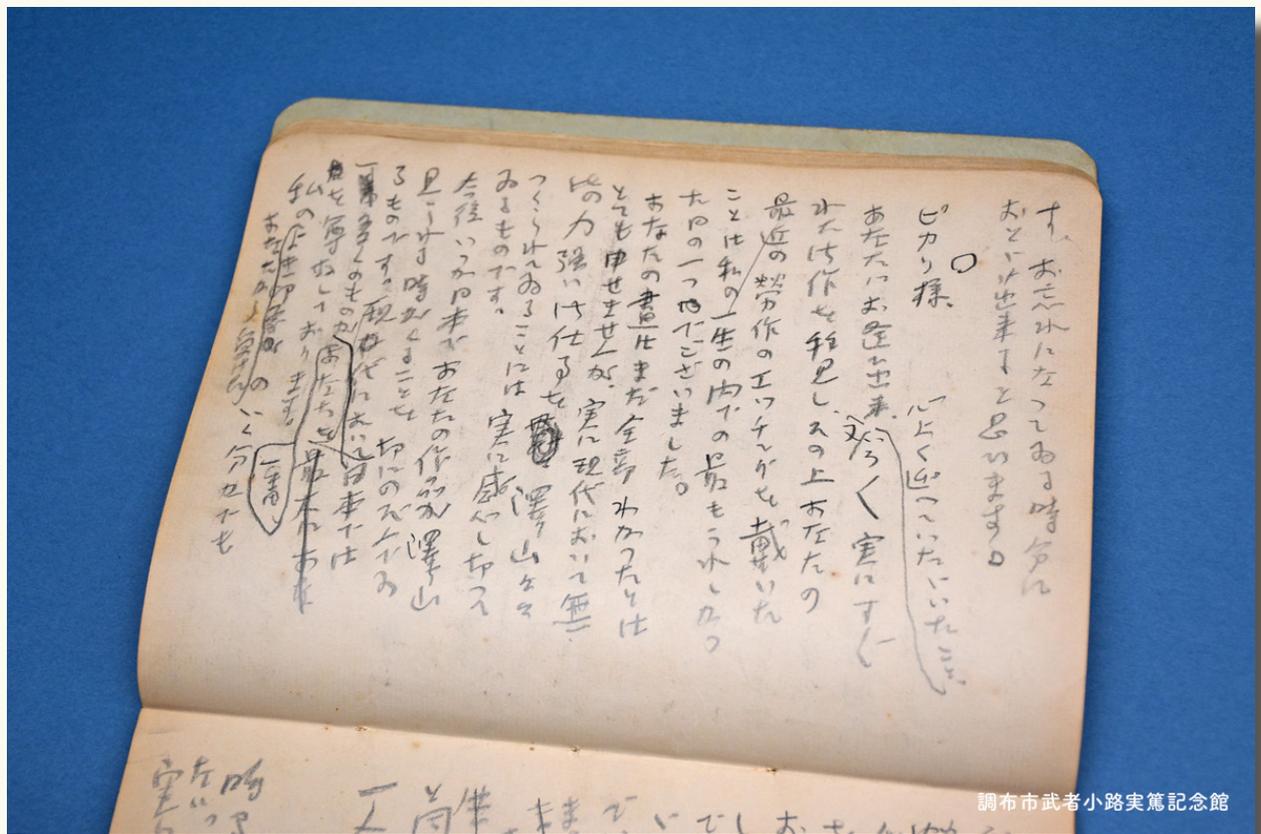
【#おうち時間で実篤を知ろう 120】

11月11日「ピカソ様 あなたにお逢い出来、心よく迎えていただいたこと(略) あなたの最近の労作のエッチングを頂いた事は、私の一生の内での最も嬉しかった日の一つでございました」

ピカソの自宅を訪ね、応接室に通された実篤はセザンヌとルノアールの30号くらいの絵が掛けてあったことを意外に思ったそうです。ピカソは別の部屋から自分が描いた素描や水彩などを持ってきて、実篤に見せてくれました。そして、感心する実篤に、ピカソはひとつの銅版画をプレゼントしてくれたのです。

その銅版画はエッチング「ミノーロマシー」。目の前で実篤の名前を丁寧に書き入れてくれました。実篤はくるくる巻いて大切に欧米から持ち帰り、額に入れて応接間に飾って楽しみました。

現在は東京都現代美術館の所蔵ですが、この夏「実篤、欧米へ行く」展でお借りし、当館でご覧いただけるのです!

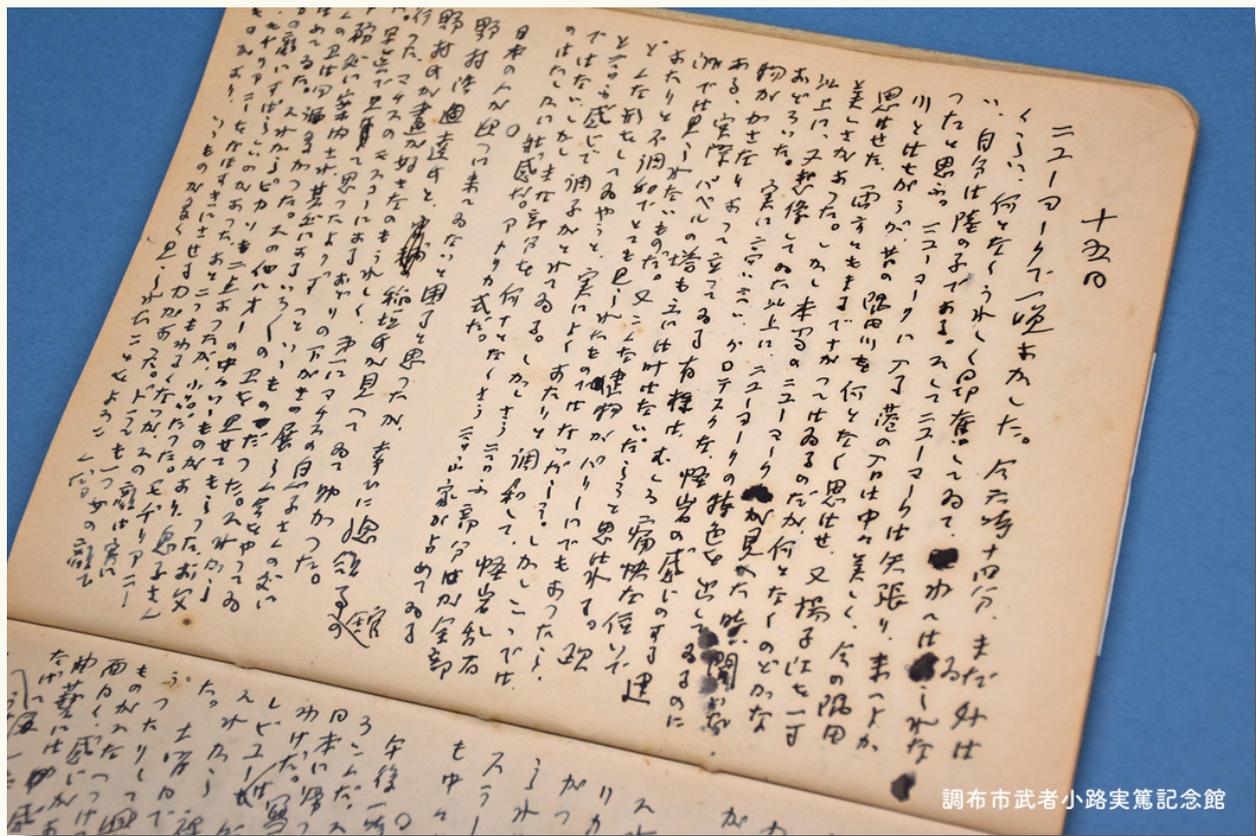


◦ 7月10日 (金) 掲載《午前》

【#おうち時間で実篤を知ろう 121】

11月15日「ニューヨークが見えた時、聞いた以上に、想像していた以上に、ニューヨークの特色を出していたのにおどろいた。(略) 高い高いグロテスクな怪岩の感じのする建物が重なりあって立っている」

バベルの塔もこれには叶わないだろうと独特な例えをした実篤は、エンパイアステートビルやメトロポリタンミュージアムなどを見学し、ワシントン、シカゴを巡り、サンフランシスコで本土に別れを告げ、船で太平洋を横断するのです。その途中ではホノルルに寄港し、ハワイアンダンスを見たそうです。



◦ 7月10日掲載《午後》

【#おうち時間で実篤を知ろう 122】

11月23日「よろこび 一日一日日が近づくよろこび。日本に帰るよろこび、友にあうよろこび、愛する人々にあうよろこび、皆が一つになって迎えてくれるよろこび」サンフランシスコを発つ日に書いたものです。

当館にある日記はこの日で終わっていますが、『欧米旅行日記』（1941年・河出書房）には太平洋上の日記が掲載されています。12月12日に横浜についた実篤は、まさに一筆書きで地球を一周しました。生涯一度きりとなった実篤の欧米旅行、明日から始まる展覧会を楽しんでいただく一助になれば幸いです。



おうち時間で実篤を知ろう >> 実篤、欧米へ行く 篇

◦ 7月10日掲載《午後》122とは別スレッドで掲載

【# おうち時間で実篤を知ろう おわり】

2月29日に始めてから133日間、月曜を除いて毎日発信してきたこの取り組みもこれが最後です。

皆様のおうち時間にすこしでも楽しいひと時をお届けできていたら、これ以上嬉しい事はありません。

お読みいただき誠に有難うございました!

